

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【下落合小学校】

⑥ 次年度への課題と学力向上策	
知識・技能	課題がみられた設問に対しては、今年度中に校内で共通理解を図り、解説資料やおかわりチャレンジ(類似問題)等を活用しながら次年度に引き継げるようにする。今後も児童が主体的に取り組むことができる授業を展開し、「教師が教える授業」から「児童が学びを獲得する授業」へ転換を図りながら、自ら獲得した学びを生活の中で生かす(やってみる・つかってみる・広げてみる)ことにより、さらに知識・技能を高めていく。
思考・判断・表現	まずはカリキュラムマネジメントの充実を図るために1年間の振り返りとしてデザインマップの見直しを行い、各教科の関連付けを図り、学びが深まるようにする。そしてカリキュラムマネジメントを視点とした6年間を貫くストーリーの中で、特に総合的な学習の時間における体験活動をより充実させ、児童が地域の中にある学校として地域社会をつくる一員であることを感じながら獲得した学びを新規導入のiPadなどを活用してアウトプットする機会を増やし、表現力を高めていく。

① 今年度の課題と学力向上策		
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「情報の扱い方に関する事項」の正答率が低い。 <指導上の課題> 従来の「教師主導」「教え込み」型の授業から「児童が学びを獲得する授業」へと、必要に応じて授業の形態を柔軟に変えられるようにする。	⇒ 主体的に取り組む、自ら獲得した力としての知識・技能を高める授業を展開する。自分の考えを整理・表現するための思考ツール等を積極的に活用し、情報を整理したり、関連付けられたりできるようにする。【通年・1単元1回以上】 様々な体験活動を通して、リアルな体験から知識・技能を身に付けられるよう工夫する。【通年・1単元1回以上】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 「物語を読んで心に残ったところとその理由をまとめて書く」問題で無回答が目立った。 <指導上の課題> 個に応じた指導を充実させていく必要がある。児童主体の学習活動の機会が十分に確保できていない。	⇒ ICTの活用や「じ・し・や・く」を意識した授業展開を、発達段階に応じながら推進し、表現力(特にアウトプット)を育てる。【通年・1単元1回以上】 各教科において探究的な学びを設定したり、総合的な学習の時間を充実させたりするなど、児童が主体的に取り組む活動を充実させる。【通年・1単元1回以上】

⑤ 学力向上策の実施状況	
知識・技能	B 重点目標である「真の主体性をはくむ教育」について、学校課題研修を通して、児童にも少しずつ変化がみられてきている。授業において、思考ツールを活用したり、実生活と結び付けて考えさせたりすることに加え、家庭学習においても実生活との結び付きを意識させる発問を通して、「知識・技能」が生きて働く力として定着しつつある。
思考・判断・表現	B 各教科において「じ・し・や・く」を意識した授業展開を行い、課題等を自分で選べるようにしたり、タブレットを活用しクラウド上で思考を共有したりすることを通して力を高めた。探究的な学びを推進するため総合的な学習の時間については、年間指導計画や全体計画を改めて見直し、各学年より地域に密着した課題設定を行った。例えばアート体験や車いすバスケットボール選手との交流、スーパーアリーナ見学、企業等の連携等新たな活動を実施し、課題を自分事として捉えて学習を進めた。また獲得した学びをパワーポイントやCanvaなどのソフト・アプリを活用しながらまとめることにより、表現力(アウトプット)が育てられている。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語においては、「言葉の特徴や使い方」や「わが国の言語文化」について国・県の平均を上回ったものの、「情報の扱い方」については、県の平均を下回った。情報と情報の関係づけの仕方、図などによる語句と語句の関係の表し方を理解使うことに課題がみられた。算数においては、国・県の平均を大幅に上回った。9割以上の正答率も多く、学習内容の定着がみられる。理科についても、国・県の平均正答率を大幅に上回った。ただ「身の回りの金属について、電気を通すもの、磁石に引き付けられるものがあること」の知識については、国や県も正答率が極端に低かったが、本校も同様に定着が不十分であることが分かった。
思考・判断・表現	国語においては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」いずれの内容も国・県の平均正答率を上回り、大幅に上回った問題もあった。算数においても国・県の平均を上回っている。ただ「分数の加法」については、加数と被加数が共通する単位分数の見つけ方を数や言葉を用いて記述することに課題がみられた。理科についても国・県の平均を上回り、既習内容の定着が見られる一方で、「レタスの種子の発芽の条件」については、平均正答率が低かった。国・県においても3割程度の正答率であったが、差異点や共通点をもとに、新たな問題を見出し、表現することができるかどうかについては課題がみられた。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	3年生から5年生まで、全ての教科で、市平均正答率を上回った。特に4年生は大きく上回るとともに、昨年度の偏差値を上回ることもできた。6年生に関しては、理科の一部課題がみられた。設問ごとに見てみると、「漏過の適切な方法」や「食べ物の養分の吸収」に係るものなどが市の平均正答率を下回っていたが、「乾電池のつなぎ方」、「振り子の1往復する時間」については、市平均を大きく上回り、前年度までの既習事項が身に付いている。理科においても定着まで時間をかけ、復習の時間を大切にしたり、反復練習を取り入れたりとすることが必要であると考える。無回答率については、ほぼゼロであったが、「食べ物養分に変えられる」という設問に対しては、市の結果と同様に高い結果となった。設問で問われていることを正確にとらえることができなかつたことが考えられる。
思考・判断・表現	全ての学年、全ての教科で市平均正答率を上回ることができた。特に4年生の国語においては、大きく上回り、良好な結果となった。しかし「同一集団の経年比較」で見ると、4年生の算数では昨年度の偏差値を若干下回っている。6年生においては、国語・社会で8割以上の正答率となった。ただ、設問ごとに見てみると、国語において、「文章全体の構成や展開を考えることができる」という設問については市平均と同程度で7割の正答率となった。また、社会においては「江戸時代の政治の仕組み」が市平均同様で7割の正答率となった。国語においては、筋道の通った文章を書くことや、社会における資料の活用方法などが、課題として明らかとなった。「書くこと」については低学年からの系統的な指導、社会については、情報収集や資料の見方等について、さらに丁寧に指導する必要があると考える。

③ 中間期報告		中間期見直し
評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B 校内研修において、「主体的な学び」につながるような授業を研究している。少人数のグループを編成し、自主的に授業を公開したり、指導法について協議したりしてきている。今後も「個別最適な学び」、「協働的な学び」、「探究的な学び」をテーマに、児童が自ら学びを獲得する機会をさらに研究していくとともに、「情報の扱い方」(情報と情報の関係づけの仕方)についても系統立てて指導できるよう、共通理解を図っていく。また、体験活動やゲストティーチャーを招いての授業等を通して、知識・技能を身に付けられるようにする。	変更なし
思考・判断・表現	B 1学期に行われた指導訪問においては、ICTの活用や「じ・し・や・く」を意識した授業を展開することができた。普段の授業においても、各単元で1回以上はそのような授業を展開していく。調査で課題がみられた「記述による表現」については、各教科における学びを生活と結び付けて表現する活動を取り入れるなど工夫しながら、改善を図っていく。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)